

第4章 AT活用支援実施に係る工夫、留意事項

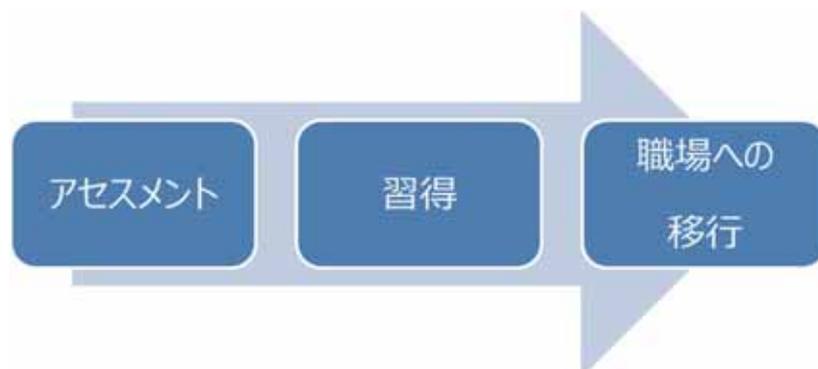


図 18 「AT活用支援の流れ」

1 アセスメントの段階

高次脳機能障害者は、一般的に病識を持ちにくいことが知られています。残された認知機能をアセスメントしたり、困り感を確認することは、対象者を理解する上でとても重要です。また、高次脳機能障害者の補完手段を検討する際は、現状の認知機能に加えて受障前のスケジュール管理の方法等を確認しておくことも忘れてはいけません。受障前の生活様式は、受障後も残された資源として保たれていることが多く見られます。記憶障害等の影響により、新たな行動を習得することは困難が伴うため、受障前の生活様式を活用できないか検討する視点が重要です。

(1) 対象者の自己認識

プログラムでは、認知機能のアセスメントに加え、対象者の障害認識やATを含めた補完手段の活用度合いを確認するため、各種質問紙等のツールを用いて確認しています。そのうち、AT活用に関連するツールを紹介します。

ア 特性チェックシート

プログラムでは、対象者の特性や事業所の行う具体的配慮等を伝えるための情報整理シートであるリファレンスシート³を、対象者と支援者の協同作業で作成します。リファレンスシートの作成過程の初期に、対象者へ記入を求めるのが特性チェックシートです。特性チェックシートは、高次脳機能障害の症状の現れ方を112項目に渡り具体的に取り上げています。(図19)

³ 詳しくは、実践報告書 No.32「高次脳機能障害者の復職における職務再設計のための支援」を参照してください。

特性チェックシート		年 月 日
No.	<p>■下記の障害特性について自分にあてはまるかどうか、次の三択で回答してください</p> <p>○…あてはまる △…あてはまるかもしれない ×…あてはまらない</p>	○・△・×
1	他者から呼びかけられても直ぐに反応しない	
2	家事や趣味を始めても、すぐに疲れたり飽きたりして止めてしまう	
3	会話において話があちこちに飛び、話にまとまりがない	
4	持ち物をあちこちに置き忘れてなくす	
5	一つひとつの動作、作業に時間がかかる	
6	作業手順の抜けや見落とし、誤字脱字、入力ミス、計算ミス、道具の置き忘れなど、いわゆるケアレスミスが多い	

図 19 「特性チェックシート」

イ AT活用度アンケート

アンケート(第2章 P14、16 参照)は、AT活用ガイドブックで紹介した機能について、「知っているか」、「どの程度の頻度で使用しているか」を問う内容です。プログラム受講者のAT活用度を確認するとともに、グループワークを円滑にすることを目的に活用しました。

(2) 神経心理学的検査の実施

神経心理学的検査を実施し、受講者の認知面の特徴を把握します。また、結果のフィードバックにより、受講者の自己認識を確認します。なお、職業センターでは対象者の負担を考慮し、医療機関から情報提供が得られない場合に限り、必要に応じて神経心理学的検査を実施しています。

(3) 情報収集・行動観察

ア 支援機関、家族からの情報収集

職業センターの支援開始にあたっては、支援計画を策定するため、地域センターをはじめとした支援機関から対象者の情報を収集します。情報収集の内容は、受障前の生活様式や性格、受障の経緯をはじめ、これまでの治療経過、現在の健康状態や健康面の留意点・配慮点、高次脳機能障害の状況、就職や職場復帰に対する対象者・家族の考え方、支援機関の支援経過・方針等です。

高次脳機能障害の状況を確認し、支援実施上の留意事項を確認しますが、特に、失語症がある場合は、失語症の程度や種類、コミュニケーションの状況等を確認します。

イ 事業所からの情報収集

職場復帰支援プログラム受講者であれば、復職先の会社が定める復職要件や手続き、復職時に事業所が想定している職務内容についても、情報収集します。この際、重要なのは、職場復帰後に事業所が想定する職務内容に応じた補完手段を検討することです。例えば、第3章で紹介した失語症の方を例にあげると、社内の清掃等、PC入力を必要としない職務内容で職場復帰するのであれば、タッチキーボードの機能は覚える必要がなくなります。プログラムにおける支援期間は限られていますので、優先順位をきちんと整理し、計画的に支援を実施することを心がけています。

加えて、職場復帰した際に、事業所においてATを活用することができる職場環境なのか確認する必要があります。事業所によっては、セキュリティの関係で、Windowsの機能制限やスマートフォンやタブレットの持込みが禁止されている所があります。本稿で紹介した機能の多くは、インターネット接続がなくても使用することができるものですが、事前にATの使用が可能か確認をしておくとい良いでしょう。

ウ プログラム中の行動観察

個別面談や作業、朝夕のミーティングなど、プログラムの様々な場面で受講者の行動を観察し、受講者の障害の特徴を確認します。

(4) ケースフォーミュレーションシート(CFシート)

対象者の課題を多角的に把握し、プログラムスタッフで情報共有するため、Oliver Zangwill Centreの取組を参考に、ケースフォーミュレーションシート(以下「CFシート」という。)を作成し、支援に活用しています。(図20)現時点で、CFシートはプログラムスタッフ間で情報共有するために使用していますが、今後は、対象者ととも課題を整理するために活用することを検討しています。

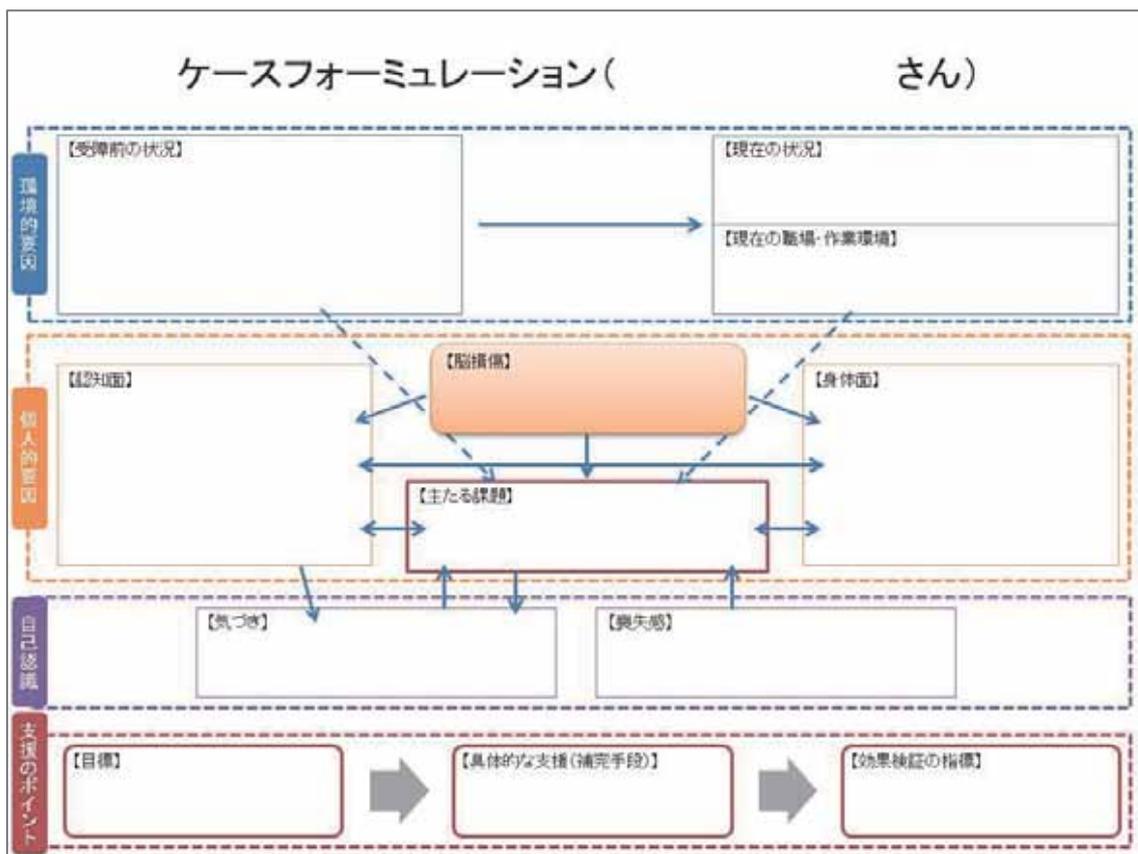


図 20 「ケースフォーミュレーションシート(CFシート)」

2 習得段階

A Tを活用した支援を効果的に進めるためには、高次脳機能障害の諸症状に留意して支援を進める必要があります。本稿の作成に当たり、各種情報収集と専門家ヒアリングの結果を踏まえ、以下の点に留意して支援を実施しました。

(1) A Tの活用を提案する段階

A Tの活用を提案する段階では、A Tありきで考えるのではなく、受講者や会社へのアセスメント結果をふまえ、様々な選択肢の中から検討を進める必要があります。

① 補完手段の検討

補完手段は以下の発案者により検討され、3つの選択肢があります。

発案者：受講者本人

支援者

他者(家族、医療機関、事業所)

選択肢：外的補助具(例：メモリーノート、付箋、スマートフォン、PCの機能等)

環境の調整(例：付箋を机やP Cに貼る、メモ用紙を机に置く等)

日課や手順の確立(例：作業後に目視で見直す、一日の流れを決める等)

② 情報を集約すること

補完手段は、多ければ多いほど活用が徹底されなかったり、情報が分散されるリスクが発生します。高次脳機能障害者の中には、情報が分散されることで、どこに何を記録したのか分からなくなったり、補完手段そのものに気づかなくなったりすることがあります。もし、複数の補完手段を活用するのであれば、情報を集約する手段を予め整理する必要があります。

③ 自己決定を促す

受講者が新たな補完手段を活用するためには、受講者自身が補完手段を選択し、自己決定することが重要です。そのためには、受講者が日常生活場面等を踏まえて、高次脳機能障害に関する障害認識を深め、補完手段習得の必要性について理解することが望まれます。また、支援者は、アセスメントをした上で、補完手段を用いることでどのような効果が見込まれるのかを説明し、受講者の自己決定を促すことが重要です。なお、補完手段の選択の際は、決して支援者の都合で、A Tまたはアナログの補完手段に偏らないようにしなくてはなりません。

(2) A Tを身につける段階

高次脳機能障害者が新たな技術を学習することは時間がかかりますが、プログラムでは下記の点に留意し、支援を行っています。

① 作業課題に取り組む中での実践

作業課題に取り組む中で、A Tの活用を繰り返します。支援者は介入しない場合と介入する場合を意図的に設定し、A T活用の有用性や効果をアセスメントします。

② 振り返り

個別面談で、受講者と補完手段の効果を共有するとともに、受講者の補完手段に対する有用感や障害の自己認識についてアセスメントします。

必要に応じて補完手段の変更について相談します。

3 身につけた補完手段を職場等へ移行する段階

(1) 関係者との情報共有

プログラムでは、連絡会議(職場復帰支援の場合、開始12週目頃)等において、会社、支援機関、家族等とプログラムの進捗状況等の情報共有を行います。(図21を参照)これらの機会を活用し、補完手段の活用やその効果について共有します。

(2) 就職・職場復帰後の支援

プログラム受講後は、引き続き地域センターの支援サービスに移行し、多くの方は、地域センターのサービスである就職・職場復帰後のジョブコーチ支援等を活用されています。職業センターは、プログラムで確認できた障害特性や効果的な補完手段について情報共有を図り、スムーズに職場に移行できるよう地域センターをサポートします。

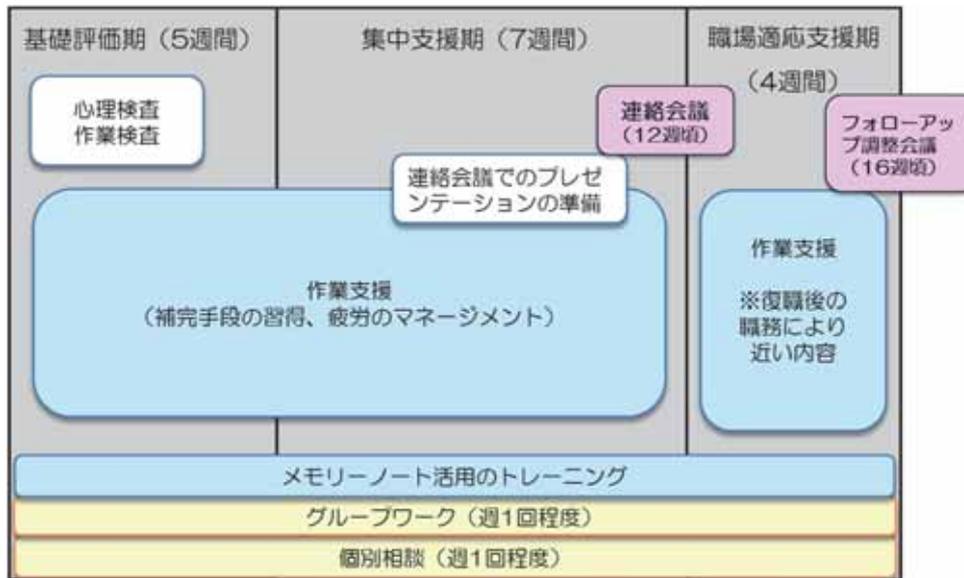


図 21 「プログラムの流れ(職場復帰支援の場合)」

4 その他

(1) グループワークの実施と目的

高次脳機能障害者のグループワークは、「ピアモデルとの意見交換により障害認識・障害受容が促進されやすい」、「ミスに対する補完方法を互いに助言し合う」等の効果がある¹⁾とされています。今回の報告書のテーマである「アシスティブテクノロジーを活用した高次脳機能障害の就労支援」においても、グループによる講義形式とグループディスカッションの形式でATの知識付与や日常生活・職業生活の具体的な活用について情報共有を図りました。日常生活・職業生活におけるATの活用度合いは、個人差があります。普段活用しない方であれば、ATへの関心を高め、ATを活用するきっかけ作りとすることが、グループワークの目的となります。

ア グループワークの流れ

AT活用に関するグループワークは、1回あたり約2時間で実施しました。実施の流れは図22のとおりです。

目的の説明	<ul style="list-style-type: none"> • A T活用の目的(ガイドブックの前半のページ)を説明する
アンケートの記入	<ul style="list-style-type: none"> • アンケートに、知っている機能、使っている機能を記入する
意見交換	<ul style="list-style-type: none"> • 使っている機能のうち、お勧めの機能や具体的な使い方を紹介する
ガイドブックの解説	<ul style="list-style-type: none"> • ガイドブックの解説を聞く • 調査票に、今後使いたい機能を記入する
感想	<ul style="list-style-type: none"> • 受講者の全員から感想を発表してもらい、共有する

図 22 「グループワークの流れ」

イ 受講者からの感想

グループワークでは、ガイドブックを配付し、受講者から紹介された機能の詳細を確認したり、職員が内容を解説したりしました。また、今後新たに活用したい機能を確認するとともに、感想を求めました。実際のグループワークでは、以下のような感想がありました。

- スマートフォンの機能は知っているが、Windows の機能はほとんど知らなかった。いろいろ使ってみたい。
- ガイドブックで活用できそうな機能を試してみたい。
- 知っていても活用しきれていないことが多いので、いろいろ試してみたい。特にパソコンの使い方を見直してみようと思った。
- 復職してから使えそうなものもあったので、使ってみたいと思う。文書を入力した時に読み上げてくれる機能は使えそう。

ウ グループワークの効果と課題

これまで個別に確認していたA Tの活用状況を、小集団の場を使って効率的に、また、チェックシートをもとに網羅的に把握できました。また、個別のアプローチで機能の活用を提案した場合、スタッフからの一方的な提案と捉えられ、活用に対して拒否的な感情を抱く場合もあると思われませんが、グループワークの中で「他の受講者から紹介される」という形を取ることで、活用への抵抗感を軽減できるといった利点があります。実際に、複数の受講者から、機能の活用を前向きに捉えた感想が聞かれました。

課題としては、グループワーク終了後の個別支援への導入がスムーズにできるか、といった支援者の力量の問題が挙げられます。また、意見交換のパートの充実度は、グループワークに参加する受講者のA Tの活用度や、興味・関心の程度に左右されるものと思われ

ます。あまりA Tに馴染みのない受講者が多い場合には、効果的にA Tを活用している具体的な事例を紹介したり、A Tの活用体験を伴う宿題を提示したりといった工夫が必要になると思われます。

(2) A Tの活用を支援できる人材の育成

A Tの活用について、高次脳機能障害者の支援担当者に様々な場面で意見を求めたところ、「A Tの活用を検討する必要がある」という意見が多くあがりました。一方で、支援者自身が「A Tの使い方がよく分からないので、支援や活用の提案に自信が持てない」という声も少なくありませんでした。A Tを高次脳機能障害者が活用するためには、高次脳機能障害者の認知機能を適切にアセスメントし、対象者の認知機能の低下を補完することに適したA Tを提案する知識が求められます。支援場面でA Tを活用するのであれば、支援者自身がA Tについて学び、機器や機能に対して関心を高めることが必要です。

(3) A Tがあれば解決できるわけではない

A Tを活用すれば、高次脳機能障害者の認知機能の課題を全て解決できるわけではありません。A Tは目的を達成するための手段でしかありません。その手段を有効に活用するための仕組みを会社で検討する必要があります。加えて、持続可能な仕組みとして事業所内で機能させるためには、対象者や社内担当者個人の取組に任せきりにするのではなく、社内でA T活用の目的の共有と活用するための役割分担を明確にする必要があります。

(4) ユーザーインターフェースの変更に注意

Windows や iOS 等のOS (オペレーションシステム)は、機能の追加、セキュリティ対策やシステム不具合の改善等を目的としたアップデートを定期的に行います。加えて、コンピューターと人間(ユーザー)との間で情報をやり取りするための方法、操作、表示といった仕組みを示すユーザーインターフェース(以下「UI」という。)が変わることがあります。UIが変わるとアップデート前と操作方法等が変更される可能性があるため、OSをアップデートする際には注意が必要です。

※セキュリティの観点からは、定期的なアップデートが必要です。

【引用文献】

- 1) 独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構障害者職業総合センター職業センター：支援マニュアルNo. 5「高次脳機能障害者の方への就労支援～職場復帰支援プログラムにおけるグループワーク～」, 2010